

栗本薫

時の石



角川文庫

とき いし
時 の 石

くりもと かおる
栗本 薫



角川文庫 5428

昭和五十八年五月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七二二一(大代表)

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——厚徳社 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-150003-0946(○)

時の石

栗本 薫



角川文庫 5428

目次

時の石

五

徴^{かひ}

二五

BURN (紫の炎)

一八

解説

鏡

明

二六

時の石

ぼくと飯沼孝志いいぬまたかしがそれを見つけたのは、期末試験のはじまって二日めのことだった。試験といえ、地獄のようなものだ、おとなは思っているのかもしれないが、ぼくたちにとつては、むしろ試験期間中は楽である。

長い退屈な授業はないし、一日に二時間、我慢しさえすれば、あとはまるまる午後があくし、勉強のほうだって、日ごろきちんとノートさえとっていれば、二年後の受験にむけてつづければならない、基礎力養成というやつよりは、ヤマもかけられる、範囲も限られている、よっぽど楽なのだ。

それに——これは、まだ飯沼や楠城くすぎには白状したことがないけれども、実をいうとぼくは、何によらず試験というものが、それこそクイズ番組から抜きうちテストまで、なかなか好きなのだ。

あの独特の緊張感もいいし、更に言うなら、自分の力をためす、というのは、若いものにとつては必要なゲームだろうと思うのだ。

もつとも、飯沼には、そんなことは言えない。飯沼が、何か思いつめているんじゃないか、とは、ぼくは前から何となく感じていた。

だから、二時間目の数学がおわって（バンザイ！）がたがたしている教室の中で、

「谷本、ちょっと、話があるんだけど、一緒に帰らないか」

飯沼が、眼鏡の奥で、青白い顔をひきつらせて囁いたとき、わかったたよ、という意味で、黙ってうなずいてやったのだ。

「なんだ、よう、次郎、『コミック・マーケット』のぞきにいかねエの」
前の席で、ききつけた楠城が不平そうな顔をした。

「あしたもあるじゃん。あした、行くよ」

楠城のふくれっ面をよこ目で見て、ぼくと飯沼は、掃除当番がガタガタやりだした2Cの教室をさっさとびだしてきてしまった。

「わあ、いい天気だなあ」

下駄箱の中に数2Bの教科書をブチ込んで恨みを晴らし、校庭にとびだすと、思わず、嘆声が洩れる。

まぶしさに、目が細くなる。青い青い空に入道雲だ。グラウンドで、テニス部員がネットをはっている。野球部が地区予選で練習によそへ行ってるから、ひさびさにでかい顔して、バレー部がランニングをはじめるところだ。

期末試験なんて、夏休みの予告編みたいなもんさ。空気には濃い緑色の若葉と排気ガスの入りまじった匂いがし、校門へつづくアスファルトの道は光をはねかえしてちかちか輝いた。

「やれやれ、あとは国語に物理と、ほいから英語で終わりだな。チヨロい、チヨロい」
ぼくは鞆をふりまわした。飯沼は、はあーッと長い溜息をした。

「まだ三科目もあるんだな」

「もう四つも終わったんだぜ。それにオオラスは英語一科目だもん。とにかく、よかったよ。数学おわるといつもほんと、スーッと気が楽になるよ」

それに英語だもん——ぼくは、胸のなかで付け加えた。英語は担任兼務の有沢先生だ。すんなりしていて、髪をいつも首のうしろできっぱりとたばね、さびしそうな白い顔と、いい声をしている。ぼくがいい声っていうのは、ペツチャンコなかわいこちゃん歌手みたいな声でなく、風鈴みたいに、透明で、リンリンとひびくような声なのだ。楠城にいわせれば、なんだあんな柳の下でうらめしや——って言いそうな女、ってことになる。

飯沼は、話にのってこなかった。一年のときから、学年一、二の秀才で、なんの苦もなくトップ・グループに入ってる男だ。試験が嫌いなわけではない。きっと、よくよく悩んでるんだろう——そう思って、ぼくは行き先もきかず、飯沼のあとについていった。

埃^{ほこり}っぽい長い道を、照りつけられながら歩いてゆくと、背なかに汗でシャツがべったりとはりついてくるのがわかる。飯沼はごうごうと砂埃をあげて行きすぎる、大型トラックのあいだをかいくぐって、国道をつつきり、佐藤製鉄所の裏をずっと歩いて、交叉点^{こうさてん}のところまでは、いつも通りに歩いていった。

その交叉点から、右に折れると私鉄の駅だ。飯沼はためらわず左に折れた。

となると、行きききはただひとつ、多摩^{たまがわ}川の川原だ。案のじよう、飯沼は、土手に出て、前にも二、三回いっしょに来たことのある、橋ゲタの下の日陰にもぐりこむと、座れよ、と言っ

た。

左のほうも、右のほうも、草野球のガキどもだ。わあ、という歓声があがる。頭の上を車が渡ってゆく。草が川面をわたってくる風になびいて、有沢先生の髪の毛みたいにきれいだ。

「いい風だね」

飯沼は、答えなかった。

「やっぱ、川の上は、風が冷たいや」

「……………」

「ガキども、元気だね。もう、夏休みかね、小学校は。苦勞がなくていいや」

「……………」

「きょうの数学さあ、オレ、完全にヤマ外しちゃったよ。大谷おおたにの奴きた汚ねえよな。ひとつことも、積分から出るようなこと、言っいてなかったじゃん」

無言。

ぼくは、根負けして黙りこみ、そつと飯沼を見やった。飯沼の顔は青かった。

日陰だったからかもしれない。それとも、川原の草の色がうつるのかな——ふつと、そんなことを考えたとき、

「谷本」

飯沼が、川面を見つめて、口をひらいた。

「な——こんなこと、考えてみたこと、あるかよ。オレたち、何のために生きてるんだろ」

ってさ」

思いつめた声だった。

そら、おいでなすった——ぼくは、こっそり、首をちぢめる。これをやるから、ぼくはこいつが苦手なんだ。

いい奴なんだけど、真面目で堅物で——

「なんか、違うんだよな」って、楠城なら、言うところだ。

「なんか、正解じゃねエのよ——アンタもうクソして寝たら？　って言いたくなるんだよな」

それは、アタリだと思うけど、でも、ぼくは決して飯沼ってやつが嫌いじゃない。

飯沼の仇名は「藤波くん」という。「月とスッポン」に出てくるドがり勉の名まえで、この仇名で呼ばれると飯沼は気持ちがいのようになって怒る。

要するにホントに真面目なんだ。楠城ならたちまち、そらPHP、ってわめくだろうが飯沼はマジで悩んでるんだから、ぼくはそうばかりにする気にもなれなかった。

「うーん——考えないこともないけど、でもあんまし、好きじゃない、そういうの」

「好きじゃないって、何が？　好きとか、嫌いって問題じゃないだろう」

困ったな——ぼくは、あいまいな、照れ笑いをする。

「おれなあ、谷本。大学行くの、よそうかと思ってるんだよ」

「ふーん」

好きなようにすればいい。なににも大学なんか絶対じゃない。でも、それじゃ身もフタもない。ぼくは、

「どうしてき。おまえくらい出来る奴」

やさしくきいてやった。

「考えちまったんだよ——ほら、あつたろ、こないだの、K高生がおやじに殺されたうちで、またおつかさんが死んだ話」

「ああ、あれ」

「おれ——このごろ、親見てるとき——おれひとりにこんな思いさせて——ッて、やたら憎らしくて、殺してやりたくなるんだよ」

「おい、おい」

「一体何のためにこんな思いするんだってき——おれ勉強嫌いなんだよ。イヤでイヤで、たまらないんだよ。でも、他にしたいことがあるわけでもないし——こないだっから、思いつづけてたよ。いったいなぜ、おれはこんな苦しい思いをしてるんだろうつてき。生まれてから一度も、楽しい思いしたことなんかないじゃないか——ずーっと、テストと勉強と塾とき……なぜ、こんな思いするんだい。なぜ、しなきゃいけないんだい」

「なら、やめたらいいじゃないの」

「やめられるかよ！」

飯沼はわめいた。

「この間にD組の今井^{いまい}だの、菊池^{きくち}だの、みんなコツコツ成績あげてると思ったら、やめられるかよ。不安で、気が狂いそうになって——やめたいんだよ。でも、やめられないんだよ。やめて何するんだよ。おれは、生まれて十六年、これしか知らねえんだぜ。何も、楽しかったことなんてなくて——何ひとつ、おもしろかった思い出なんてなくて……」

「あと、二年ないじゃないか。大学入りや、それまでじゃない。これまで我慢して、どうしてあと一年半くらい——」

「一年半も我慢しろっての！」

ぼくは困って、飯沼の昂奮^{こうふん}がしずまるのを待とうと、足もとの小石をひろって、ポチャーンと川面に投げこんだ。

「おれ昔から身体が弱かったから、外で遊ぶのもほとんどしなくてさ——たかがあんな三角ベースで、わーわー騒いだ覚えだってありやしないんだ。こんなの、異常だよ。しかも、おまえらだってそう思ってるんだ。な、思ってるだろ。おれのこと、軽蔑^{けいべつ}してんだろ。あいつは勉強好きの変態だ、くらいに思ってたんだろ。どうせ社会に出りや、ここで一番や二番上の奴よか、人好きのする奴がつよいと思ってたんだろ。おれは友達もないし、何もできない。だから勉強で劣等感ごまかしてんだって、みんな思ってたんだろ」

「よせよ、誰も^{だれ}おまえのこと、そんなふうに思っていないよ」

「いや、みんな、おれのこと、軽蔑してるんだ。みんな、おれのこと嫌ってるじゃないか。だけどそんなの、おれのせいじゃない。他に何もとりえがなくなつて、そんなの、おれのせい

じゃないじゃないか！面白いこと言えなくなつて、うまくつきあいができなくなつて、楠城みたいにスポーツできなくなつて、そんなの、仕様がな^いじゃないか。こんなこと考えながら大学いつて、何しろつていうんだよ！ どうして、おれだけが、こんなにばかにされなきやならないんだよ。菊池だつて今井だつてみんなガチガチに勉強してんのに、みんなあいつらはガリだの変態だのつて、いわないじゃないか！ おれ、これまでに、ほんとに楽しかったことなんか、ほんとに、一度もないんだ。いつだつて、何かしら我慢して、嘘^{うそ}ついて、中学へ入れば、高校へ入れば、大学へ入ればつてき！ もう、いいよ、もう沢山だよ。いつだつて、自分ごまかして、やりたいこともやらずにいて、だから何もやりたいことなんかわからなくなつちまつてき——」

「飯沼、なあ、おちつけよ。おまえ、疲れてんだよ。勉強少しやめて考えりゃいいじゃん。何もそんなに自分を追いつめることないよ。一度も楽しいことなかったなんて、そんなこと、あるわけないじゃん。何か、あつたはずだよ。どんな人間だつて、必ず何か——」

「ありやしない。おれは人間として、かたわなんだ。おれなんか生きてたつてしょうがないんだ」

「飯沼、飯沼」

ぼくは、また困惑して、小石を川に放つた。

「まわれ、まわれ」

「ランニングホームーだ」

わあッ、と稚い声^{おきな}が沸く。ぼくは草をつかんでむしり、また指さきにさわった小石をひろって放ろうとし、——そして、眉^{まゆ}をしかめた。

「なあ、谷本、頼むから教えてくれよ、おまえ、生きてるの、楽しいか？ おまえは、いつもみんなに囲まれて楽しそうにしててさ——マンガ家になるんだって言ってただろ。おまえ、本当にやりたいこと、あるんだろ。なんのために生きてんのか、わかるかよ。言ってくれよ、なあ、頼むから——」

飯沼は、ふとことばを切り、ぼくをのぞきこんだ。

「何、やってんだよ」

「ううん——」

ぼくは眉をしかめて右手のなかのものを見おろした。

「な——何やってんだよ。何だい、そんな石にかまってないでおれの話——」

「ちょっと、待って」

ぼくはいくぶん青ざめていたかもしれない。

「こ——この石、変なんだ」

「変？」

まわりの夏が、しんと音をひそめたような気が、ぼくはした。

動きをとめた世界の中で、

「ストライーク」